

「橋浦泰雄関係文書」について

鶴見 太郎*

On Hashiura Yasuo's Documents

Taro Tsurumi

1. はじめに

一九九七年三月一日付の『洛南タイムズ』、『朝日新聞』は、故郷の宇治から労農党公認で出馬し、第五六議会で治安維持法改悪に反対し、会期中の一九二九年三月五日、白色テロルに斃れた代議士・山本宣治の「死顔絵」が、日本画家橋浦泰雄⁽¹⁾の遺族宅で宇治山宣会によって六十七年振りに発見され、宇治の山本家所管の保存庫に納められたことを同作品の写真とともに報じている（別紙）。

「死顔絵」を描いた橋浦泰雄は当時、全日本無産者芸術連盟（ナップ）中央委員長の任にあり、同じ年の一月には日本プロレタリア美術家同盟（AR）の結成にも立ち会っている。絵自体は縦一・五メートル、横一・九八メートルにわたって張り合わせた紙にコンテで描かれたもので、戦前は勿論、橋浦の生前も公表されることなく保管されていた。恐らく戦後、自伝『五塵録』を書く時になって残したと思われる橋浦自身の覚書には、次のような言葉が記されている。

山本宣治 神田光栄館階上、一九二九年三月五日暗殺さる。六日早朝私は電話で知って直ちにかけつけ、スケッチ、後刻マスクを（石膏）とるために鈴木賢治を派遣す。

遺骸三月八日東大で解剖、一高前キリスト教青年会館に一応安置、後午後、本郷二丁目仏教青年館で告別式 太田（谷一）司会、大山議長、元田肇衆議長弔辞。永井柳太郎其他衆貴議員多し、私はナップ代表弔辞 大塚氏にゲキレイされる、河上肇博士弔辞 二時間ばかりで終り出棺〔以下略〕⁽²⁾

その場で一気に呵成に描ききった「スケッチ」を後日、時間をかけて手直したものがこの「死顔絵」になったと見られる。ただし、この作品を絵心のある人の眼で見た時、直ちに気がつくのは、その角度の悪さであるという⁽³⁾。これはすなわち、スケッチをとった時、描き手の陣取った位置が対象からかなり離れた所だったことを意味している。事件直後、詰めかけた多くの同志の中であって、ナップ中央委員長の要職にあった橋浦は当然、その場で山本宣治の遺体のすぐ近くに通されて然るべき人物であった。だが作品の角度の悪さはこの時、橋浦が居合わせた他の面々を次々に遺体の近くに座らせ、自分は目立たない場所に座った可能性を示唆している。

一九二〇年代から三〇年代にかけてのプロレタリア文化運動で、幾多の重要な地位を占めたにもかかわらず、運動家としての橋浦泰雄は、少なくとも個人として表舞台に出て強い指導性

* 日本近現代史

を発揮することはほとんどなかったし、またそれを望まなかった。このスケッチが示唆する事柄もまた、そうした橋浦の性格をよくあらわしている。

2. 橋浦泰雄をめぐる問題点

一九三〇年代以降、社会主義運動から離脱した多くのマルクス主義者が柳田国男の門を叩き、柳田の弟子となる現象が起こった。研究史上に橋浦泰雄が登場する時、このマルクス主義者にして柳田の高弟として民俗学を学んだ経歴が大きな要因となった。

これまでの研究は、橋浦の朴訥な人柄を確実に捉えている。また一九二五年九月、「原始共産制」について柳田に教示を乞う所から出発して、日本の村落社会に於ける「共同労働」、「共同分配」の慣行調査へ向かっていった柳田入門に到る内的な動機についても、すでに検証されている⁽⁴⁾。ただし、その成果として民俗学者として橋浦が残した仕事については、民俗資料を民俗学的に処理すればエンゲルスの理論を実証できると考えていた「楽天的マルクス主義者」という福田アジオ氏の指摘を最後に、少なくとも民俗学者としては創見に乏しいとの見方が定まり⁽⁵⁾、それ以降目立った評価の推移を見ない。

一九九七年五月、筆者は過去五年にわたって資料閲覧の上でたびたびお世話になっていた橋浦泰雄の長男・橋浦赤志氏から、橋浦の残した蔵書、資料の整理、並びに然るべき公共機関への寄贈の仲介を依頼された。幸い寄贈先は橋浦の故郷である鳥取県立公文書館に内定し、大まかな整理を終えるまで資料は筆者の手元に置かせていただけることとなったため、七月二一日、筆者はこれらを本学（宇治）に移送した。そし

て八月から作業を開始して、九八年六月現在も継続中である⁽⁶⁾。

橋浦泰雄に関係する資料のほぼ全般を見渡せる環境を与えられて、いくつか未公開の資料、例えば冒頭で掲げた覚書、橋浦に宛てられた手紙類、橋浦が関与した種々の会合のパンフレットなどを読むにつれ、これまでの橋浦研究が抱えた問題点が目につくようになった。

その第一は前述の特異な経歴に引きずられた結果、マルクス主義と柳田民俗学の合流点から、独自の民俗学を打ち立てる可能性があったという、研究者からの過大な期待を橋浦が負わされたことである。これは福田氏の描く橋浦像に特に顕著である。晩年の橋浦が運動と民俗学を両立させる上で特に気を付けたのは、運動によって民俗学関係者に累を及ぼさないことだったと回顧している通り⁽⁷⁾、とりわけ一九二〇年代から三〇年代にかけて社会主義運動に従事した人間が互いに性質の異なる組織の中枢で仕事をする場合、この問題は細心の注意を要した。この点で運動に於ける肩書の大きさと民俗学に於ける思想上の成果は、同時代、運動に携わった側から見た時、必ずしも比例するとは限らない。したがってまず、柳田民俗学とマルクス主義を止揚するなどという研究史上で課せられた重い課題から、橋浦泰雄という人物を自由にすることがある。

いまひとつは史料の扱い方に属する問題である。すなわち、これまでの研究は橋浦の仕事、思想を検証する際、橋浦自身の書いたもの、それも多くは民俗学上の著述ばかりを典拠にしてきた。橋浦のように運動組織、なかんずくその組織化に深く関わった人物を見る時、橋浦の手になる史料だけではなく、橋浦に向けて発信された情報を吟味し、彼を取り巻く人々が橋浦という人物をどのように見たのかを知る必要があ

る。

本稿は以上の点を踏まえて、この「橋浦泰雄文書」の概要を紹介し、作業の過程で発見した資料を随時、分析考証することによって、橋浦泰雄の人物像を再構成しようとするものである。「文書」が示唆する橋浦像を重視するため、あらかじめ項目を立てて網羅的にあらゆる文献を記載することはせず、橋浦の人となりを知る上で重要と思われるものを選んで掲げることにする。

なお、後で見るように橋浦が所蔵した資料の形態は単行本、雑誌、パンフレット、フィールド・ノート、ポスター、私信など非常に多岐にわたっており、なおかつ橋浦に宛てられた資料が大きな割合を占めるため、厳密な意味で「橋浦泰雄関係文書」（ぶんしょ）と呼ぶには難がある。しかし二〇年代から戦中戦後に到るまでプロレタリア文化運動、生協運動、民俗学と幅広く活動した一人の人物の意志によって集められ、かつ残された経緯を重視して以下、「文書」で通すことにする。

3. 「文書」の概観

(1) 肉筆原稿、日記、採集手帖、覚書

この項目は橋浦直筆のものに限る。

一九二〇年代後半に活躍したほとんどのマルクス主義者が、自身の郷土、家から離れることで運動へ挺身して行った過去を持つのに対して、橋浦泰雄はめずらしく、上京した後も郷里の鳥取との行き来が頻繁だった。

青年期にあたる一九一〇年代、橋浦は鳥取で同世代の文学仲間、白井喬二、野村愛正、吉村憐骨らとともに、回覧雑誌『回覧』、『水脈』を刊行するが、「文書」の中で最も古い時期に属する文献は、この頃橋浦が夜素鳥の筆名で書

いた肉筆原稿である⁽⁸⁾。上京してのち、プロレタリア文化運動に従事して以降も、橋浦はこれら同郷の友人との交流を続けたほか、講演会、美術展覧会等の所用で帰鳥している。こうした経歴は、他のマルクス主義者が検挙後、運自身の家族、郷土を顧みなかったことへの後悔を要因として運動から離脱し、結果として郷土回帰の形で即、国家主義へと転じていく軌跡とは明らかに異なっている。

戦前期の社会主義運動に従事する者の常として、橋浦もまた原則として日記を付けなかった⁽⁹⁾。例外として継続的に付けられたものとして以下の三冊が残されている。

- ①「小説・日記 一九一三年」と銘打たれた雑誌帖と兼用のもの。
- ②一九二一年七月一九日から二三年十一月一六日及び一九六九年一月に付けられたもの。
- ③一九三四年元旦から五月末、三七年六月、三九年九月、六四年六月、七四年三月と断続的に付けられたもの。

①は一九一三年一月七日から始まって、召集による帰郷をはさんで、翌年の四月九日、再上京のための旅装を整えるところで終わっている。必ずしも毎日付けられたものではなく、長いところでは二カ月以上飛ぶ箇所もある。一九一二年九月に小説家を志して上京した橋浦の焦燥と自疆が入り交じった、さながら散文詩を思わせる叙述である。トルストイに心酔し、北海道へ渡って自らを養うだけの土地に鋤を握って天命を待ちたいと綴ったあたりに後年の有島武郎との親和力を垣間見ることができる。なお、裏表紙から六四頁は自作のアイヌ語辞典になっている。

各日付の間隔がまちまちの点では②も同様で

ある。但し二三年の有島武郎の情死と関東大震災直後の部分の記述は膨大なものであり、同時代の観察記録としても、史料的价值が高い。③は既に社会主義運動が解体期に入ってからのもので、背景には三四年一月のプロレタリア美術家同盟（AR）の解散決議を受けて、橋浦が運動の第一線から身を退いた経緯がある。分量の上では三冊中最も多い。消費組合活動以外は運動絡みの記述はなく、民俗採集の旅行や地方の郷土史家との交流、身辺雑記がほとんどである。②と③の間にはプロレタリア文化運動への挺身、柳田との出会いとそれに続く民俗学者としての研鑽という橋浦の人生の中でも重要な時期を置いているが、前述の如く運動に従事する者としての鉄則から、記録は残されていない。

民俗採集手帖のうち、纏まったものでは次の五点がある。

- ①「静岡県周智郡気多村 昭和九，八」四冊
- ②「佐賀県神埼郡三瀬村及び東松浦郡厳木村 昭和一〇，一一」
- ③「宮城県伊具郡筆甫村見聞記 昭和一〇六～八」
- ④「高知県高岡郡梶原村 昭和九 一二」
- ⑤「村制調査 飛騨，富山，越崎，美濃，会津，日光，越後，長崎，岩手，五島 その他」

①～④はいずれも柳田国男の指導で一九三九年から三六年にかけて行われた「全国山村生活調査」で橋浦が担当した調査地に対応している。一連の調査で柳田の門下生たちは、あらかじめ柳田によって設けられた一〇〇項目の質問を各頁に綴じた「採集手帖」を携帯し、調査はその質問への答えを記入する形式をとった。現在、成城大学民俗学研究所柳田文庫に所蔵されている「採集手帖」を見ると、若手の調査者は不慣

れなことも手伝って、多くの頁を空欄にして帰京せざるをえなかったのに対し、橋浦の「採集手帖」は情報量と観察の綿密さでは群を抜いている。古文書、統計資料の使用禁止や古老への聞き取り調査の偏重といった、戦後の社会学から批判される多くの拘束を持っていた「採集手帖」に比して、「文書」に於けるこれらのフィールド・ノートは随所に村の景観、野草のスケッチがあり、画家として自らの技量を自在に駆使して民俗採集を行った点で興味深い。

覚書の大半は橙色の柀目の入った縦一〇・七センチ、横一四・九センチのカードに書かれたものである。用途は現地での民俗採集、重要と思われる会合でのメモ、本からの抜粋、論文推敲のためのメモと極めて多岐にわたっている。冒頭の山宣暗殺直後のメモや、ナッポ成立時の人選記録など運動関係の覚書が数点含まれていることから見て、橋浦がこの規格のカードを使用した始めたのは概ね戦後と見てよい。民俗採集記録用に使ったものの一部に系統番号が付されているほかは、統一された書式のものは少ない。

(2) 書 籍

単行本は計八九〇冊である。マルクス主義関連の文献は意外に少なく、それも戦後のものが多い。寄贈本を含めて民俗学の書籍の占める割合が大きい。これ以外に雑誌、パンフレットなどが約六五〇冊（三〇〇誌程度）ほど。民俗学雑誌については橋浦が寄稿した号には全て葉が付されている。パンフレットには三〇年代初期のものを中心に非合法のものが幾つか含まれている。少数の例外を除いて（例えば大杉栄訳のクロボトキン『原始共産制部落』）書き込みはほとんどない。これは(1)で見たカードの一部が読書ノートとして利用されていたことと関連

している。

蔵書の特徴として橋浦が装丁、挿絵を担当したことで所蔵された書籍が幾つかある。代表的なものとしては、柳田の『国史と民俗学』（六人社 一九四四年 装丁）、『野草・野鳥雑記』（甲鳥書林 一九四〇年 挿絵）、堺利彦『楽天囚人』（売文社 一九四八年 装丁）など。これ以外にも一九三九年から四四年まで橋浦は『民間伝承』の編集長を務め、同誌の表紙絵、カットのほとんど全てを担当する。

一九二〇年代後半、学生運動からそのまま再建共産党の指導者となった者の多くが運動離脱後、困窮して思想犯保護団体で糊口を凌いだ例は数多い。これに対して堺利彦、山川均など平民社から第一次共産党の世代が強かな生活力を発揮し、戦時下も時局と一線を画したことはよく指摘される。実弟で第一次共産党の創立メンバーの一人だった橋浦時雄との関係から彼等との交流が深かった橋浦もまた、日本画家としての技能をもって戦時下を生きたことを、これらの挿絵・装丁本は示している。

(3) 芳名帖、案内状、手紙類

本人に向けて発信された情報という点から、橋浦像を知る上で、これまで見過ごされてきた事実を伝える貴重な史料である。特に芳名帖と案内状の多くは友人達が催した橋浦の絵画頒布会をめぐるもので、この催し物を通じて多彩な人物が交錯している。

確認されるだけで十数回の頒布会が行われているが、中でも一九二八年五月の「小品画会」は当時橋浦がナップ中央委員長の任にあったにもかかわらず、呼びかけのビラには発起人の一人に柳田が名を連ねている。罷り間違えば運動への資金提供と取られても不思議はないこの事業は、運動と画業・民俗学を峻別する橋浦への

信頼によって成り立ったといえよう。この時の会計内容と購入者は橋浦の手になる「小品画會おぼえ 一九二八」によって知ることができる。特に堺利彦、市川義雄ら橋浦と旧知の社会主義者と渋沢敬三、岡正雄といった民俗、民族学者が互いに相知ることなく橋浦の絵を購入していることは注目に値する。

一九三七年五月の頒布会は橋浦にアトリエを持たせるという具体的な目標を掲げて行われた。やはり柳田が発起人の一人になっている。同年末にはこのアトリエが完成し、橋浦の五〇歳を祝う会を兼ねて記念会が催されている。この会に集った人々は当夜の「芳名帖」によって明らかであるが、柳田の門下生を中心とする民俗学関係と中野重治に代表されるかつてのプロレタリア文化運動の活動家という二つの系統はここでも認められる。中野重治の回顧では柳田と初めて出会ったのはこの席上だったことになっているが⁽¹⁰⁾、「芳名帖」に柳田の名前は記されていない。

史料の点数でいえば手紙類が最も多く、概算で四〇〇〇通を超える。柳田国男からのものだけで八五通、このほか有島武郎三三通、中野重治六通、山川均・菊江夫妻合わせて六通などを重要史料とするのが順当なところだが、それに劣らず目を引くのが一九三〇年代後半以降、日増しに多くなっていった地方の民俗学研究者からの手紙である。成城大学民俗学研究所に移送された分を含めて、事務的な連絡の場合、これらの手紙の宛て名は「民間伝承の会御中」、「柳田国男先生」、「橋浦泰雄先生（様）」と、ほぼ三通りの書かれ方をしている。手紙の内容はほとんどが「民間伝承の会」発行の書籍購入、入会希望、バックナンバーの申込み、新しい郷土研究会設立の報告であるが、少なくとも戦時下、地方の研究者にとって民俗学の組織者とし

ての橋浦は、しばしば柳田に置き換えられるか存在であったことをこの三通りの宛て名は示している。

(4) ポスター、ビラ類

性質から見て(3)に分類することも可能だが、ポスターのうち数点は明らかに橋浦手書きのものであり、プロレタリア文化運動の中核にいた人物が同時にこうした仕事を自ら行った点に、橋浦の人柄がよくあらわれているため、独立して項目を立てた。現在四六種類が確認されている⁽¹¹⁾。

内容はナップ関係の美術展覧会、演劇、映画上映会、演説大会の予告にはじまり、『無産者新聞』、『戦旗』の講読者募集、国際消費組合デーへの参加を呼びかけたものなど、ほぼ橋浦の活動歴に対応している。

4. 小 括

最晩年の橋浦は、師の仕事を独創性をもって受け継ぐことを弟子の本分とするなら、自分は柳田の弟子と呼ばれるに値しないと語った上で、自分が最も心を砕いたのは、民俗学の組織化であったと述べている⁽¹²⁾。

橋浦に寄せられた手紙の持つ特徴のひとつは、思想を問わず幅広い人物から来信があること、そしてそこに長期にわたる交流が認められることである。戦前、明確な党籍と転向歴を持たなかった橋浦にとって、多くの転向者に見られるような交遊関係の激変はない。青年期、郷里の鳥取に於ける文学サークルを通して知り合った友人との交流を出発点として、やがてマルクス主義の運動家からの来信が散見されるようになり、これに三〇年代以降、おびただしい民俗学運営上の手紙が加わる。そして来信上の変化によってそれ以前の手紙のやり取りは決して破綻

しない。

来信を俯瞰することで浮かび上がってくる橋浦泰雄とは、プロレタリア文化運動、消費組合活動、そして民俗学の組織化という運動の中でひとつひとつの仕事を実地にこなし、理論よりも具体的な仕事の中で信頼関係を築いていった人物像である。ナップ期、一時中央委員長として事実上運動の頂点にしながら、自分でポスターを即興で描いたことはその一例である。また橋浦の五〇歳の会に出席した面々も民俗学、プロレタリア文化運動と立脚点を異にしながら、そこに集った動機は誠実かつ朴訥な人柄で各々の組織を纏めた橋浦への慰労だったに違いない。

プロレタリア文化運動、消費組合活動がいずれも解体して以降、橋浦の活動の場は「民間伝承の会」に移されるが、研究者同志の信頼の築かれ方は、やはり変わることはなかった。こうした橋浦の姿勢は、理論よりもまず採集された事実を重視する柳田の方針と相まって、戦時下の『民間伝承』を際立って時局色の少ない雑誌とする。

柳田民俗学の組織化に転向マルクス主義者がかつての組織力を発揮したことは指摘されているが⁽¹³⁾、橋浦の場合、マルクス主義者に見られる強固な上からの統制に基づく組織論の影響はその経歴にもかかわらず、ほとんど見当たらない。むしろ経験に裏打ちされた信頼関係を積み重ねる形で民俗学の組織化をすすめていったといえる。それはまた生前、自らを「マルクス主義者」と呼んだことはなく、「コミュニスト」と呼んだ⁽¹⁴⁾橋浦にふさわしい。

「橋浦泰雄文書」が持つ一九二〇年代から戦時下にかけて民俗学をめぐる織りなされた人間関係の検証はようやくその緒についたばかりである。

本稿は一九九七年一〇月二三日、「京都文教大学文化人類学科学科セミナー」での発表原稿を修正，加筆したものである。

【注】

(1) 橋浦泰雄（一八八八～一九七九）大正，昭和期の民俗学者，日本画家，社会主義運動家。鳥取県岩美郡岩美町に生まれる。高等小学校卒業後，郷里で『平民新聞』，堺利彦訳『共産党宣言』，クロボトキン『相互扶助論』を読む。一九二〇年日本社会主義同盟創立大会に参加。二一，二一年第二，第三回メーデーで検挙。二六年プロレタリア芸術連盟 中央委員長。二八年ナップ中央委員長。三二年日本無産者消費組合連盟中央執行委員。

この間，二五年に柳田国男を訪れ以後，民俗学上の指導を受ける。一九三五年「民間伝承の会」成立以降は，地方在住の郷土史家と密接に交流し，柳田民俗学の浸透に尽力。三九～四四年『民間伝承』編集長。

一九四五年日本共産党入党。四六～四七年 東京都生活協同組合連合会理事長。



1997年3月1日付『洛南タイムズ』

(2) 橋浦泰雄による覚書（手書き）。

(3) 一九九七年九月一〇日，蓮仏亨氏の指摘による。

蓮仏氏は宇治山宣会顧問で，橋浦赤志氏とは旧制鳥取二中（現・鳥取東高校）時代同級であり，「死顔

絵」の発見者でもある。長年，建築コンサルタントとして活躍された。

(4) 代表的なものに益田勝実「『炭焼日記』存疑」（『民話』一九五九年一一，一二月，一九六〇年二月），竹村民郎「柳田民俗学の軌跡」（『日本史研究』一九六二年一一月）がある。

(5) 福田アジオ「日本の民俗学とマルクス主義」『歴史民俗学博物館研究報告』第二七集一九九〇年一五三四頁。

(6) 一九九二年一一月，このうち柳田国男の指導で行われた「食習調査」に関する採集用カード，『民間伝承』運営上の資料は成城大学民俗学研究所に移管された。

(7) 橋浦泰雄「柳田国男との出会い」『柳田国男研究』第二号一九七三年九九，一一五頁。

(8) 確認できるものは以下の通り。（○印はそれが簿冊一冊を構成することを示す）。

○「手書き本 名づくる日まで」（回覧雑誌）第一号，第六号／「水脈」一二月号（回覧雑誌）一九一二年／「MIWO」一二月号一九一三年

○「水脈原稿 会規則」

○「創作原稿」（一九一四年二月二六日 脚本「牡牛の目」一幕，二月二八日 小説「柿の芽」，一九一三年五月一三日「ある夜」，九月八日「独身者」，一〇月一四日「闘争」，一九一二年一月一日「満州の春」，二月一二日「病葉」，三月二四日「漁夫の妻」，五月一三日「白眼断片」，七月一日「四〇九号，歌稿にかえて」，一〇月一日「狗肉」，一九一一年三月五日「恋の盗人」，九月一二日「ある女へ与ふる文」，九月一二日「青い星」，？「貧兎の保」，？「或女の日記」）

○「創作原稿」（一九一二年「段々畑」，一九一三年「赤夢白夢」一幕二場，一九一二年二月一〇日「河豚の腹」小説，三月八日「香煙」小説，一九一二年一月一〇日「赤燈」小説，一九一一年一二

- 月一三日「女に」、十一月七日「姉々様」、一九
一二年九月一三日「米の生る木」
- 「黒き海の音二幕五場」坂田邪洲王（大正七年一
一月二五日）
- 「野の木詩・小説」橋浦泰雄（一九〇六～二四年）
- 「若き日の路」夜素鳥（一九一〇年）
- 「鶏壺と菓子箱」（一九一四年）
- これ以外に以下の単著の肉筆原稿がある。
- 『東筑摩郡道祖神図絵』（郷土研究社 一九三一
年）
- 『民俗採訪』（六人社 一九四三）
- 『日本の家族』（日本評論社 一九五五年）
- 『民俗学問答』（新評論社 一九五六年）
- (9) 橋浦 前掲 「柳田国男との出会い」九九頁。
- (10) 中野重治「折り折りのひと」『中野重治全集』第
一九巻（筑摩書房 一九七八年）三二三頁。初出は
『朝日新聞』一九六七年十一月二〇日。
- (11) 武蔵野美術大学の柳瀬正夢研究会が作成した研究
資料「橋浦泰雄氏保存のポスターと資料など」（一
九九四年七月二四日）は、このうち四五種類を収録
している。
- (12) 一九七九年五月二〇日、鳥取民俗学会での講演
（録音テープ）。
- (13) 福田アジオ 前掲一四三頁。
- (14) 一九九七年一月二六日 筆者による宮沢總子氏
（橋浦泰雄次女）からの聞き取り。

On Hashiura Yasuo's Documents

Taro Tsurumi

In the 1930's Yanagita Kunio developed his own style of folk research and in 1935 established the Folk Society (Minkandensho-no-kai), which many communists joined in response to the control activities of the government. It has been thought that they joined to develop their insight into the people and native culture by studying Yanagita's work after their conversion from communism to patriotism. Yanagita's relationship with folklorist Hashiura Yasuo, one of the leaders of proletarian cultural movement in 1920's, has been understood to be a typical "teacher-pupil" connection case. From this documentary investigation, based on a compilation of materials once owned by Hashiura; books, personal letters, field notes, pamphlets, it is seen that from the late 1930's Hashiura was a leader of the organized movement of Japanese folklore studies. The management of organization was based on people's reliance on Hashiura, and such reliance was due to Hashiura's, moderate, realistic, and empirical personal character.